



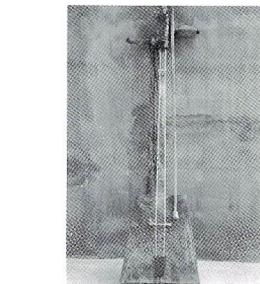
ホーミー・馬頭琴奏者  
**岡林立哉**  
 OKABAYASHI TATSUYA

72年、愛知県出身、京都在住。日本におけるホーミー・馬頭琴奏者の第一人者。静岡大学中退後、全国を放浪。'98年、モンゴルへ渡り、現地でホーミー・馬頭琴奏者として活躍するトップシンパヤル氏から手ほどきを受ける。'05年には「愛・地球博」内イベントスペースにてホーミーを披露。様々なイベントに参加し、定期的にライブを行う傍ら、自らが同行するモンゴルツアーも主催する。インディーズアルバムに「NOMAD」「北緯48度 天の底」がある。

**京KYOTIAN I.D.**  
 京のおきばりさん

取材・文/山田涼子 撮影/石川奈都子  
 撮影協力/Prinz

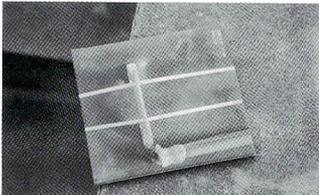
## 「一聞は百見に如かぬ」音色に魅せられた男が伝えるスピリット



「世界でも最大級」の馬頭を持つ愛器。ネックの布は、チベット仏教では神聖なところに結んだり、贈りものに使う布で、旅の途中、現地の人に「(馬頭琴が)上手くなりませうよ!」とつけてもらったお守りである



星好きになったのは、シリウスが夜空で一審明るい星だと母親から教えられた幼少のころ。ヘールポップ彗星を見るために屋久島まで行くほどの筋金入り。



'08年1月に完成した2ndアルバム「北緯48度 天の底」(2500円)は、「ホーミーは生で聴かないと良さが分からない」という信念のもとライブ会場での販売。確かに、ホーミーの魅力は生でこそ衝撃的に胸を突く

某日、快晴。市内の公園にて。新緑を爽やかに揺らすような、空へと抜ける音色が響き渡る。そこがモンゴルの大草原かのような錯覚。穏やかな表情で二弦を鳴らす岡林さんは、そのとき確実に、風や光を味方につけていた。

幼いころから星を見るのが大好きだった少年は、いつしか、地平線広がる大地・モンゴルで満天の星を見たいと願うようになる。同時にギターも好きで、「既存の商業音楽にピンと来なくなっていた時期」に独学でホーミーに挑戦する人物に出会う。北海道は阿寒湖畔のアイヌコタンで。そして、初めてのホーミーの真似事。もつと本格的にホーミーについて知りたくて、翌年にはモンゴルへ。ゲルで聴いた本物の生ホーミーは、衝撃的だった。そして、それと同じぐらいモンゴルという土地に惹かれた。「どこまでも広がる空と大地しかないのに、そこには確かに人々の営みがある」。そうして今でも幾度となくモンゴルを訪れては、遊牧民の暮らしに溶け込み、まだ知らぬ歌を求めて奥地へ旅をし、自分自身の「音」を探求し続けている。

ホーミーとは、モンゴル西部の山岳地帯で語り部たちによって伝承されてきた歌。ダミ声伸ばしながら別の音に乗せていくことで、ひとりの人間から一度にふたつ以上の音が聞こえるという不思議な歌唱法だ。現地でホーミーの教えを受け、約2カ月で習得した(現地の人も驚愕だったとか!)というから、岡林さんがあの日、湖の畔でホーミーと出逢ったのは必然だったのかもしれない。そして、

「全国各地でコンサートを開いている彼が、今後「西日本を攻めるなら」と選んだ京都。商店街など、人とのふれあいがあり、身近な社寺や名跡の散歩も楽しい。加えて、「ライブハウスは全国どこでもあがるけど、町家や個性的なカフェとか、建物そのものに味のある場所が多い」のも、演奏家としてはありがたいと思う。去る5月24日にも「楽町楽家」のイベントにおいて町家でのコンサートを開いたばかり。彼が暮らす京都で、彼の音色を聴かないなんて、勿体ないことこの上ない。

て、ホーミーの伴奏用として馬頭琴を習う。馬頭琴と聞いて、誰しも思い出すのが「スーホの白い馬」とはいえ、物語から馬頭琴そのものの姿をイメージするのは難しい。作中では、愛馬の骨や皮、筋などを使ってつくられたとあるが、現在、手にすることができず馬頭琴のほとんどは木製のボディで、ネックの先端に馬頭の彫刻が施されているのみ。馬の尻尾の毛を束ねた弦が二本。弓も同じく馬の毛だ。だが、岡林さんが「この人は信頼できる」というモンゴルの職人さんにつくってもらっている「愛器は、木ではなく前面にゼール(モンゴルに住む野生のヤギ)の皮が張ってある。皮を張ることでも木製の馬頭琴に比べて「土臭く、素朴な音色がする」と。昔ながらの古い音を好み、「内モンゴルでは、より大きくて洗練された音が出る馬頭琴もありますが、僕はあえてモンゴル製のものをオリジナルでつくってもらっています」。渋く、味わい深い音色こそを、日本で広めたいと思っているからだ。

**information**

馬頭琴とホーミーの響き渡る夜  
 日時: 7.3 (Fri) 19:00 open 19:30 start  
 会場: 堺町画廊 京都市中京区堺町通御池下ル  
 ☎075-213-3636  
<http://www.h2.dion.ne.jp/~garow/top.html>  
 料金: 2000円 (お茶付き)  
 「オフィシャル・ウェブサイト」  
<http://www.khoomiiman.info/>